

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二七七）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転(七)

中村一氏と横田村詮の出会い

中村一氏と横田村詮の出会いには本能寺の変を機とするものであったと推測される。一氏が織田信長の下で石山合戦中に木下藤吉郎に従って畿内を転戦し、信長の命で根来・雑賀・高野山の紀州を攻める。信長が三好勢に代わって畿内を支配拡大する動向に応じて、土佐一国を統一した長宗我部元親勢が天正三（一五七五）年秋から甲浦・宍喰の阿波南部から、天正五年春に祖



紀伊・和泉の山脈

谷山・山城山を越えての阿波西部から阿波に侵攻して来る。畿内と阿波の動乱の中で岩倉城を故城とし、高屋城主となっていて最後まで三好の名を背負った三好康長が天正三年四月に信長に降伏して、以後も重用されて石山本願寺・阿讃淡の三好勢との折衝に活躍する。その康長が中村一氏と横田村詮を出会わせる。一氏も村詮も生誕の年月は不詳とされるが、一氏の逝去は徳川家康の上杉攻め・関ヶ原合戦の直前の慶長五（一六〇〇）年七月一七日とされ、大龍院殿一源心公大禪定門が法名、駿府臨濟寺（静岡市）に葬られる。村詮は中村一氏と忠一父子との出会い、活躍の後に慶長八年十一月十四日の「横田騒動」での上意討ちの無念の死で了性院殿法顔宗栖大居士を法名として伯耆米子の妙興寺に葬られる。一氏と村詮は天文二二（一五五三）年

の頃の生まれでほぼ同年齢であったか、一氏が天文一二（一五四三）年の生まれの一〇才年長あったか。一氏の妹が村詮の正室となる。村詮が記録に表れるのは堺の妙国寺の日珧上人より天正元（一五七三）年に法華宗の受法した時である。一氏の業績の明白となるのは同年に木下藤吉郎が丹羽・柴田氏の両者から羽柴氏を名乗り、浅井氏の旧領の北近江三郡を与えられ長浜城主に出世した時に中村一氏が近江長浜で二〇〇石を拝領した時である。

中村一氏の出自

中村氏の系譜については、その源流は源平藤橘の諸説があつて不明であるが、『滋賀県甲賀郡誌』に「中村一氏は弥平次一政の子にして初め瀧孫平次と称し、後に中村式部少輔と改む、龍村の人なり。『近江輿地志略』に「一氏は佐々木山崎の余

流にして此の地多喜の産なり。『駿国雑志』には「中村一氏は尾州中村の住人、中村孫平次一政の子なり。本姓詳ならず」と記録される。和泉岸和田から近江水口・駿河駿府に変転して活躍する中で中村氏の系譜が整えられる。中村氏の後裔の人たちの中村会（中村忠文会長）では「甲賀の瀧村出身の瀧孫平次が木下藤吉郎の下で活躍をはじめ、藤吉郎が羽柴秀吉と名乗って長浜城主となった時に、秀吉の出身地の尾張中村の一政の家を継ぐように申し付けられ、瀧孫平次が中村孫平次一氏を称することになる」とされる。現存の中村氏の諸系図には一氏の父とされる名に一政・一逸・吉一・一義の名があり、弟に一栄・広一・智順（出家）・右近・信氏と、妹二人がおり、長女が堀尾吉晴、次女が横田内膳の正室となったとされる。

なお中村氏の出自に有力な異説が存在する。最終的には合一するものであるが、現代に肥後熊本で「肥後高砂や、能楽金春流」を伝承して活躍される中村勝家に伝承する「覚・文書」に記録される。その「覚」によると元祖中村太郎利正は鎮守府將軍藤原利仁末孫で寿永三（一一八）年正月二九日の三草山合戦に軍大將蒙り武功に励むとする。その後の一つ書きで中村勘解由範正、中村進士左衛門尉範忠、中村伯耆守正氏とし、その正氏は「細川律師定禪公に仕へ讃岐国中村郷を領知す。数度の武功有り、大和国信貴の城にて討死す」と記録され、後日に編集され、現代に刊行される『肥後中村惣斎日録』の第一巻文政十一年の項に後裔の当主が「一、志貴山へ御登りなされ、奥の院にて番僧をお頼りなされ、伯耆守御戦死の場に付き、御追膳なされ候事」と記録されている。そして中村伯耆守正氏の次に中村新兵衛尉氏正が記録され「三好日向守一党永禄十年十月十日大佛殿二陣取テ有ツルニ松永彈正少弼夜討シテ氏正ヲ討チ取り大仏殿ヲ焼亡ス。氏正ハ隠レナキ勇士ニテ三好ガ一党四国ヨリ打チ上リ、京都畿内ノ軍ニ数度魁殿乃働キ寡ヲ以テ多に勝ち萬死一生ヲ為ス事多カリケレバ鎗中村ト申ケル。三好一党ノ大將ニ撰挙、堅ク辞スレ共叶ハズシテ討死ス。誠ニ遁レバ遁ルベカリシヲ其ノ選ニ報セズシテハ生タルシルシ有ラバコソト義名ヲ請テ討死セシハ、誠ニ剛死トコソ言フベケレト信長公モホメタマフ」と記録される。そして次に

奮戦・討死したことも確かである。

信長の紀州攻め

「中村式部少輔一氏、天正五年八月、秀吉公天王寺在番ノ時、紀州雜賀一揆が木津難波ヨリ打ち出デ、具洞城ニヨキ弓鉄砲スグリ五六百人塚ノカゲニ伏置キ塚ノ上ニハ騎ノ兵少々ヒカヘ敵掛レカシ高名セント思ヘタル氣盛ナリ。秀吉公見給アリ追補ト下知ニ給ケレドモ其辺深田ナレバ皆見合セ居タル所ニ中村式部真先ニカケ向イ堀尾帯刀先手吉勝続イテカケ向イ諸共、五六十騎続キタリ。弓鉄砲雨ノ如クニ射カケレドモコトモセズ敵共数多鎧ニテ突伏セタリ。秀吉公在番ニ物始ヨシト大イニ歎ビ給ケリ。其外数度ノ合戦ノ武功多シ」と記録される。この中村一氏が前項の一氏と同一人として、信長・秀吉の登場で時代的には矛盾がない。中村新兵衛が三好日向守長逸の侍大将として大佛殿前で

信長が三好氏に代って京畿内・堺を支配し、信長包囲網の中心の石山本願寺を崩壊させるべく、本願寺への支援勢力を攻める。将軍義昭を京から由良興國寺・安芸頼に追う。天王寺合戦には勝利したものの、本願寺に味方した雑賀衆と合流した毛利水軍に織田水軍が惨敗する。信長は本願寺の強力な支援者である紀州の雑賀惣国、根来寺を攻撃の的とする。天正五（一五七七）年五月には雑賀惣国五組を分裂させ、杜家郷・中郷・南郷、根来の杉之坊を味方につけ、信長は京八幡、若江から十六日には岸和田（和泉香庄）に出陣する。二十八日に淡輪へ進出して、全軍で鈴木孫一の居城を攻

めて雑賀衆を降伏させ雑賀惣国を崩壊させた。この時に中村一氏は堀尾吉晴と共に力戦する。雑賀勢への備えとして佐野に要害を構えて織田信張・杉之坊を定番とする。毛利水軍に惨敗した信長が九鬼嘉隆に鉄甲軍艦を建造して、石山寺へ補給する毛利水軍を撃破する。天正八年四月五日に顕如法主が鷲森御坊（和歌山市）に移住して、一〇年春に石山合戦が終結する。信長が羽柴秀吉に中国攻めを命じる。それに従い中村一氏は三木城総攻撃、さらに因幡鳥取城攻め、伯耆羽衣石城の支援勢に活躍する。そして備中高松城の水攻め中に本能寺の変が発生して信長の天下布武が挫折する。羽柴秀吉が後継の「天下人」となるべく奮闘する。中村一氏が秀吉の直臣として活躍する。

岸和田合戦

本能寺の変が無ければ、根来衆・雑賀衆・高野山などの反信長の紀州勢はせん滅され、六月三日に岸和田から三好康長の養子となつた織田信孝を大将、丹羽長秀を参謀とした四国平定軍が渡海して長宗我部勢を駆逐し、阿波国主に三好康長、讃

岐国主に織田（三好）信孝がなつていて、康長と叔父と甥の關係の横田村詮の地位も人生も全く異なっていたであろう。本能寺の変を契機に四国で長宗我部勢、紀州の根来、雑賀勢が息を吹き返す。本能寺の変で三好康長が畿内に帰参して秀吉に従い紀州勢の制圧に向き中村孫平次一氏を中心となる。村詮が康長の後を追って由縁の堺の妙国寺を頼って阿波から脱出する。秀吉が天王山合戦・賤ヶ岳合戦・小牧・長久手合戦で「天下人」へ登る。中村一氏がそのために大活躍し出世する。紀州勢と長宗我部が合力して、秀吉が留守とする大坂城を攻めて徳川家康を支援せんとする。それを抑圧するために中村一氏が岸和田城主となる。大坂からの応援隊を合わせても一万そこそこの岸和田城へ三万の畠山殘党・根来・雑賀・土佐勢が攻めかかる岸和田合戦が行われ、中村一氏勢が危急となる。その時に不可思議な白法師を中心とする「蛸」の大群が紀州勢の後方から攻めかかり逆転勝利した、とされる。それが岸和田の天性寺に蛸地藏尊として祭祀され「蛸地藏尊縁起」の石碑が建立されている。

「遠く建武の昔、和田泉守高山が岸和田に城を築いたころ、蛸の背に乗り給うた地藏尊が海辺へ御姿を現されたが、乱世のため厚く信敬しないまま二百五十余年の歳月が流れた。天正十二年三月紀州根来・雑賀の衆徒が泉州を侵し、中村孫平次一氏らが籠る岸の和田城を抜こうとした。城兵らの力戦むなしく敗色ようやく濃くなつた日、無数の蛸とともに大法師が出現され、縦横に衆徒を打ち破つたから城は不思議に事なきを得た。大法師は地藏菩薩の化身に他ならない。その後、城主の霊夢によつて得た木像尊像を城内にまつたが、文禄年間泰山和尚の懇望で当天性寺に移された。それより諸人の礼拝が自由となり広大無辺のご利益があまねく伝わつたから参詣の人々と共に今日に及んでいる。有難や蛸の地藏に手を引かれ弘誓の船に乗るぞ嬉しき 泉州志・和泉各所図繪・岸和田藩志より、岩橋太吉撰」

この大法師と蛸の大群の応援隊が、蛸に見える三階菱の旗幟を掲げその畿内・堺の周辺に残留していた三好勢、その中心に横田村詮が居たのではないか、との興味ある解釈がされる、さて。



蛸地藏天性寺山門



日本一の地藏堂



蛸地藏尊縁起の石碑